

地域発・防災ラジオドラマ グループ名「大垣市防災ひとづくり塾」 タイトル 「絆」

【プロローグ】

平成××年、上流での大雨により、下流である大垣市内の河川が氾濫。事前の自主避難を試みた大井夫妻が、避難所である小学校へ行く途中、鉄砲水により流されてしまう。流されたものの、間一髪、木の枝に引っかかった大井夫妻を救出すべく、消防レスキューの赤坂隊員が出動。見事救出に成功する。老夫婦からお礼を言われる赤坂。この地は、10年前、彼がまだ高校生であった頃、その後、人命救助に身をささぐ彼の原点だった。彼は10年前の防災ひとづくり塾でのことを思い出していた。

【登場人物】

大井夫妻（被災した老夫婦 80歳代）
赤坂（消防・26歳・10年前は防災ひとづくり塾第1期生・16歳）
民生委員の藤江（60歳・女性）
長沢（災害ボランティア 男55歳 1期生）
川並（災害ボランティア 女50歳 2期生）
木戸（高校生 男 今年入塾10期生）
江崎（防災ひとづくり塾設立者 10年前40歳）

【ストーリー】

ざわめく室内・防災教室・10年前

江崎：「君、高校生？」

赤坂：「はい。大垣西北高校の一年です。たまたま学校で防災ひとづくり塾の募集案内を見て、もう高校生だし、何かやらなきゃと思って応募しました。防災の知識というか、何も知らないんですけど、よろしくお願いします。」

江崎：「こちらこそよろしく。今回はじめてこの塾は65人の入塾希望者があつたけど、一番年長は83歳、16歳の君が一番若いから期待しているよ。今、みんなで下塩田の防災マップ作りをしているんだ。君も一緒にやらないか。」

（再び、平成××年）

ナレーション

数日後、大井夫妻が水害がおさまり、自宅に戻ると、家の中は無茶苦茶になっている。呆然とする夫妻。そこへ、災害ボランティアのチラシを配りに近所の民生委員がやって来る。

藤江：「まあ、大井さん！家の中、無茶苦茶になってまってる。」

大井（夫）：「まあ、あかんわ。畳もタンスも泥だらけで、わしらではもう何ともならへんわ。」

藤江：「そしたら、大垣市と社協が災害ボランティアセンターを設置したんやわ。ボランティアに来てもらえるように頼んだるから、この用紙に必要事項記入しやくなも。」

大井（妻）：「災害ボランティアって何やろ？」
と言いながら記入（ペンの音）

災害ボランティア登場 コンコンとたたく音

長沢：「こんにちは。ボラセンから来ました。災害ボランティアです。」

大井（夫）：「災害ボランティア？」

大井（妻）：「お父さん。昨日、民生委員の藤江さんが頼んでくださった人たちがじゃないの？」

玄関を開ける音

大井（夫）：納得した感じで「わざわざありがとうございます。ご覧の通り、もう、家の中は無茶苦茶で、手が付けられんですわ。畳も重くて持ち上がらんですから、濡れた畳の上に布団を敷いて寝てるんですわ。」

木戸：「私、防災ひとつくり塾10期生の木戸と申します。どうして、2階で休みにならないんですか？2階は浸水されてないと思いますけど。」

川並：「木戸君、木戸君のおうちはおじいさんおばあさんがいないから分からないよ。いかも知れないけど、歳をとると、2階まで上がるのが辛いよ。」

それに1階にしかトイレがないと、夜中にすぐに降りてこれないでしょ。これは、避難所でも問題になっているの。」

長沢：「どうしても、お年寄りの方は、体育館などの避難所で、ドアの近くとかで寝ることが多いんだよ。それは、お年寄り自身が出入りしやすい出入口付近を選ぶということもあるんだけど、若い人たちの方が、先に避難してきて、良い場所をとってしまいうからなんだ。出入り口にいるお年寄りは、みんなの通り道にいるわけだから、寝たくてもなかなか眠ることもできないし、冷たい外の風にあたりたりして病気になってしまうことがあるんだ。」

木戸：「へえ、そうなんだ。長沢さん、川並さん、よくご存知ですね。」

川並：「私も長沢さんも、はじめは災害ボランティアのことなんて何も知らなかったのよ。10年前に長沢さんは1期生、私は翌年に2期生として防災ひとつくり塾に入ったの。それまで防災っていうと、マンネリ化したつまらない防災訓練のイメージしかなかったけど、ひとつくり塾に入って、防災って大切かも？って思ったの。それから、ずるずるとここまで来たわけ。」

長沢：「よく、江崎さんは、“防災ひとつくり塾は、ひとをつくる塾です。あわせて、防災ボランティアも育成しています”とか・・・」

川並：「“10年先を思う人は木を植える。100年先を思う人は人を植える。”って言ってたわよね。さあ、仕事仕事!!」

木戸：「はい!!」

それから3時間後

木戸：「畳がこんなに重いなんて初めて知りました。」

長沢：「水を吸った畳は、300キロ以上あるからな。とても、お年寄りでは運べんよ。もし、10年後、わしの家が浸水したら、木戸君、真っ先に来てくれよ。さあ、軒の下の土砂をかき出して、その後（あと）、消石灰（しようせっかい）をまくぞ。そうしないと泥が腐ってしまうからな。」

そこへ、赤坂隊員がやってくる。（車の止まる音）（ドアの音）

赤坂：「こんにちは。大井さん。その後お体の調子はいかがですか。」

長沢：「おお！赤坂君じゃないか！」

赤坂：「長沢さん！久しぶりですね。あいかわらずがんばってますね。ごくろうさまです。しかし、ひどいもんですね。床上浸水はするわ、いきなり鉄砲水は来るわで……。大井さんの奥さんは、ご主人さんの足が不自由だから、避難勧告、避難指示が出る前に避難所に行こうとして……。本当は正しい行動なのに……。」

長沢：「本当になあ。大井さんみたいな真面目な人がこんな目にあって。避難指示が出ても避難しなかった人たちが運よく被災しないでいる……。結果的に自分の家は大丈夫だったからいいものの、今度、川があふれたら、その時は無事かどうか……。」

赤坂：「オオカミ少年の話に似ていますよね。行政は空振りを恐れず避難勧告や避難指示を出す。それに従って避難所に行っても結果的に川はあふれないことがある。それが何回か続くと、だんだん人は避難しなくなっていくって……。」

川並：「今回、避難した人は、全世帯のたった10パーセントだって……。」

一同少し沈黙

赤坂：「20年ほど前に、この地区が水害にあったときの経験を江崎さんが語っていたのを思い出しました。そのころ、江崎さんは市の税務課の職員で、被災調査をするため、家々を回ったそうです。何でも、150センチも水が浸いているところがあつて、冠水した道路を泳いでまわったそうです。しかし、行く先々で市の河川行政はどうなってるんだ！とおしかりを受けて、結局、1日で10数件しか調査できなかったつておっしゃってましたよ。」

長沢：「そうだった。あの時、江崎さんが住民に叱られている映像が全国放送されて、テレビのコメンテーターが、住民のみなさん、こんな市に税金を納める必要はないですよ。なんて言ったもんだから、大変なことになって……。」

川並：「マスコミの力って大きいからね。あのときは他にも、避難者のお年寄りも、もうすぐ雪が降るから長靴が欲しいって言ったら、全国から何千足も送られてきて。住民はみんな喜んで、商店街の靴屋さんには仕入れた長靴が売れなくて……。もう、その靴屋さんもなくなくなってしまったけど。」

赤坂：「でも、今回のことで、住民のみなさんは気づいたんじゃないですか。本当に大切なものに。」

大井夫妻：「赤坂さん、長沢さん、みなさん、本当にありがとうございます。おにぎり握ったで、一服してちょー。」

赤坂：「ほら。」

長沢・川並：（次々と）「うん、そうだな。」

木戸：「うん、そうですね」

【ベット・ミドラーの「ザ・ローズ」がラジオから流れてくる】

赤坂：「あつ、江崎さんが生前好きだった曲です！！」

長沢：「そうだ。ザ・ローズという曲だ。わしは英語はさっぱりわからんけど。」

赤坂：「江崎さんが言っていました。この歌詞の意味は、ある人は愛とは川だという。ある人は愛とはヤイバだという。ある人は愛とは飢えだという。しかし、私は愛とは花だと思う。」

長沢・川並：「でも、江崎さんはこう歌った。」

長沢：「ある人は防災とは避難訓練だという。」

川並：「ある人は防災とは河川改修だという。」

赤坂：「ある人は防災とは耐震補強だという。さあ！木戸君もいっしょに！！」

全員：「しかし、私は防災とは、防災とは、地域コミュニティだと思う。地域コミュニティだと思う。」

（ザ・ローズの曲、フェードアウトしていく。）

終り